



自撮りは、今や、年齢、性別、国、身分、職業、場所、時間を問わず、様々な状況で行なわれる社会現象になった。世界的な自撮り現象は、カメラの歴史に革命が起きていることを示唆している。今やスマホ／デジカメの売れ筋は、自撮り機能の優劣に左右される。最近まで、メーカーは自撮り機能を軽視し戦略的重要性に気づかなかった。今回は、これまでの自撮りの歴史を再考し、自撮りの意義と重要性について考えてみることにする。

### 撮影機能の主役は、周囲撮りから自撮りへ

世界中で多くの人々が、自撮り（セルフイ）を行うようになった。これを実現させたのは、スマホの前と後につけた2枚のレンズの搭載にある。これまでのデジカメはレンズ1枚のみであった。このため自撮りを行うのは面倒であり、普及しなかったのである。

iPhoneの歴史でみれば、iPhone4（2010年）で、初めてインカメラ（フロントカメラ、自撮り用）が搭載され、これまでのアウトカメラ（リアカメラ、メインカメラ）と合わせて2枚になった。初代のiPhone（2007年）は、アウトカメラの1枚だけであった。

このスマホとSNS／インスタグラムとが結びついて、写真の世界に「自撮り革命」を引き起こした。誰もが簡単に自撮りして、ネットを通じて写真を公開・共有できるようになったのといってよい。

2013年には、セルフイ（自撮り）という用語が、英オックスフォード辞典に今年の実語に選ばれている。この2013年という年は、カメラのこれまでの歴史の中で、自撮りという撮影行為が、社会的に認められたエポックメイキングな年になった。

残念ながら、自撮りがマスコミに大きく取り上げられたのは、2014年8月欧米セレブの画像流出事件（これについては、筆者の[第59回 セレブの画像流出は氷山の一角\(2014/10\)](#)を参照）であった。

これまでのアナログカメラやデジカメは、自分の周り、周囲を写すものであった。それが自撮りスマホの登場により、自分を中心とする世界を写すものになった。写真の歴史にパラダイム・シフトを引き起こしたのである。

この革命を引き起こしたのは、伝統的なカメラメーカーではなく、新参のスマホメーカーが引き起こした点にも、注目すべきである。自撮りというイノベーションは、伝統的なカメラ業界ではなく、その周辺から起きた点に、留意すべきである。イノベーションの世界では、よく見られる典型的なパターンとってよい。

## スマホもデジカメも、自撮り機能の強化が鍵

スマホの自撮りはブームになったが、この自撮り機能が大幅に強化されたのは、つい最近のことである。それまで、アウトカメラ（メインカメラ）に比べて、インカメラ（自撮り用）のレンズ性能と機能は大きく見劣りしていた。自撮りは簡単に出来るようになったが、画質は悪く、思ったような写真が取れなかったのである。

すなわち、2010年にスマホに2枚のレンズが搭載されたが、自撮り機能は脇役に過ぎなかった。それが、この5年の間に自撮り人気が大きく高まり、メーカーはインカメラ（自撮り用）のレンズ機能の強化を、重視せざるをえなくなった。

さて、スマホの自撮り機能を大きく飛躍させるのに貢献した道具が、もう一つある。自撮り棒である（これについては、[第65回 スマホによる自撮り革命を推進させる自撮り棒\(2015/04\)](#)を参照）。一見、単純な補助器に見えるが、自撮り革命を引き起こした陰の功労者としてよい。

この革新性は、平成26年、米タイム誌の「2014年度のイノベーションベスト25」に選ばれたことからわかる。面白いことに、この自撮り棒が最初にブームになったのは、2013年末のインドネシアのジャカルタ（[www.focus-asia.com](http://www.focus-asia.com)）とされ、欧米先進国からではなく、新興国から世界に広まったのである。

残念ながら、この自撮り棒は、人々の集まる場所（駅のホーム、美術館、博物館...）での使用は、危険であり迷惑になるということで、使用禁止するところが増えている。

スマホによる自撮りブームに焦ったのは、本家本元のカメラメーカーである。カシオは、2011年に自撮りが出来る（液晶とカメラが回転する）デジカメ「EX-TR100」を発売した。しかし、日本や欧米では当初売れず、この意味では、ほぼ失敗作とってよかった。

幸運なことに、この「EX-TR100」は香港で大人気になり、中国や台湾などアジア圏に人気広がった。東南アジアの若い女性に、「顔が綺麗に撮れるカメラ」として、SNSを通じて大ブームになり、中国では「自拍神器」という名称で呼ばれている。これ以降、カメラメーカーは、自撮り向けのデジカメの発売を急ぐようになった。

さらに、自撮り機能を大きく拡充させるカメラに、衣服や乗り物などに装着して撮影するアクションカメラ（ウェアラブルカメラ）がある。このカメラでは、米ベンチャーのGoPro（ゴープロ）が有名であり、スノーボードやスキー、サーフィンをしながら、自撮りが出来る。同社は、2004年に最初のカメラ（ビデオカメラ）を発売している。

以上見てきたように、自撮り向けのカメラに求められるのは、女性が求める綺麗に写る自撮り機能であり、空や海を問わずどこでも写せる自撮り機能にある。後者の例としては、危険な場所や状況下での「エクストリーム自撮り」が流行している。現在、この危険なエクストリーム自撮りを、安全に行える創意工夫がメーカーに求められている

(TadaakiNEMOTO)